



生駒市立鹿ノ台中学校 第3号

校長室だより

令和4年6月6日

1学期も早いもので折り返し地点を迎えようとしています。1年生は中学校生活にも少しずつ慣れ、廊下ですれ違ふときに「こんにちわ!」とあいさつしてくれる人がずいぶん増えました。2・3年生は委員会活動や部活動等でも先輩としてしっかりと役割を担ってくれていますね。

中間テストが終わり、期末テストまで大きな学校行事はありませんが、だからこそ、この6月は自分のペースで落ち着いていろいろなことに取り組むことができる貴重な期間となります。1日ごとに「今日はこんなことをがんばれた」と思える充実した日々を積み重ねていきましょう。

ブラックホールの撮影に初成功!

5月13日の新聞各紙に「天の川銀河で初めてブラックホールの撮影に成功した」という記事が掲載されていました。そもそも「ブラックホール」とはどんなものなのでしょうか。ウィキペディアには、「宇宙空間に存在する天体のうち、極めて高密度で、強い重力のために物質だけでなく光さえ脱出することができない天体である。」と書かれています。ブラックホールは光を全く出していないため、とても見つけにくい星なのです。そして、この星は太陽の30倍以上の重さの星が大爆発をおこしたときにできる星なのです。この爆発でできた星は、光も、光の仲間もすべて吸い込んでしまうのです。

さて、そのブラックホールの撮影方法について朝日新聞には次のような説明がありました。(5.23 朝日新聞 「いちからわかる!ブラックホールどうやって撮影する?」)
「世界6か所にある8つの電波望遠鏡で同時に観測し、連動させることで巨大望遠鏡に見立てて観測ができる。8つを連動させた巨大望遠鏡の直径は、

地球の直径に近い約1万キロ。撮影されたブラックホールはとても大きくて、地球から遠く離れている。そして、これは私たちが地球から月面にあるゴルフボールやテニスボールを観測するような感じ。ブラックホール自体は光を発しないので、その周辺の電波をとらえて画像にした。”見えた”というのはブラックホール周辺の電波をとらえて輪郭を浮かび上がらせたということである。今回観測に使用された望遠鏡は、APEX(チリ)、アルマ望遠鏡(チリ)、IRAM30m望遠鏡(スペイン)、ジェームズ・クラーク・マクスウェル望遠鏡(米国ハワイ)、アルフォンソ・セラノ大型ミリ波望遠鏡(メキシコ)、サブミリ波干渉計(米国ハワイ)、サブミリ波望遠鏡(米国アリゾナ)、南極点望遠鏡(南極)です。得られた生データは、ドイツの電波天文学研究所とアメリカのマサチューセッツ工科大学のスーパーコンピュータで処理された。」と。

ブラックホールのどの説明を読んでも、そのスケールの大きさは想像もつかないことばかりですが、世界の国々が協力し、チームを組んで「ブラックホールの撮影」というありえないことを成し遂げたのです。

私たちの身近な生活においても、1人では達成できない目標をチームメンバーの力を合わせることで実現できる、という可能性は多くあります。「自分もメンバーの一員として、役に立っている」という意識が、自分の行動に自信を持たせ、ひいては誇りにつながるのです。得られる達成感が大きくなるにつれて、ますます楽しくなります。また、1人では心が折れてしまう困難に直面したときも、チームで目標に向かって協力していれば、お互い声を掛け合い励まし合うことも可能になります。班・学級・学年・係・部活動・委員会等のそれぞれのチームで、ぜひ、みなさんも何か目標に向かって仲間と共にチャレンジしてみてください。

保護者の皆様へ

先日は、授業参観に多くの保護者の皆様にご出席いただき、誠にありがとうございました。今後も感染症対策をしっかりと行いながら、教育活動を継続していきます。保護者の皆様のご協力とご理解をいただきますよう何卒よろしくお願いたします。